ATSUGI SYMPHONY
ORCHESTRA
Since 1977

Bedřich Smetana
Libuše – Overture

Antonín Dvořák
Cello Concerto in B minor, Op. 104

Antonín Dvořák
Symphony No. 7 in D minor, Op. 70

厚木交響楽団
第94回
定期演奏会

Bedřich Smetana
Libuše – Overture

Antonín Dvořák
Cello Concerto
in B minor, Op. 104

Antonín Dvořák
Symphony No. 7
in D minor, Op. 70

2026.5.3（日・祝）

厚木市文化会館 大ホール

共催：厚木市　後援：厚木市音楽協会

お問い合わせ
厚木交響楽団
（042-749-4391／島）

ごあいさつ

団長
島　達朗

本日は、厚木交響楽団「第94回定期演奏会」にご来場いただき、誠にありがとうございます。新緑がまぶしいこの季節に、ここ厚木市文化会館大ホールにて皆様をお迎えできましたことを、団員一同心より厚く御礼申し上げます。

1977年に産声を上げた当団は、地域の皆様に温かく見守られながら歩みを続け、いよいよ来年、**創立50周年**という大きな節目を迎えようとしております。半世紀もの長きにわたり、この厚木の地で音楽活動を続けてこられましたのは、ひとえに日頃から支えてくださる皆様の応援の賜物です。本日のステージは、その感謝の気持ちを込め、次なる50年へと繋げる大切なステップとして準備してまいりました。

今回のプログラムは、ボヘミア音楽の神髄に迫る重厚な構成です。幕開けは、スメタナの歌劇「リブシェ」序曲。チェコの民族精神を象徴する荘厳な響きで、祝祭的なステージを始めます。続いて、若きチェロの俊英・藤原寛太さんをお迎えし、ドヴォルザークの「チェロ協奏曲」をお届けします。藤原さんの情熱的な音色とオーケストラとの対話は、まさに音楽の喜びそのものです。そして後半は、ドヴォルザークの「交響曲第7番」です。指揮者の石﨑真弥奈先生のダイナミックかつ繊細なタクトに導かれ、当団の歩みを象徴するような、力強く深みのある響きを目指して練習を重ねてまいりました。

私たちはこれからも「地域に愛されるオーケストラ」として、一音一音に真心を込めて音楽を届けてまいります。来年の50周年イヤーに向け、さらに進化を続ける「厚響サウンド」を、本日は最後まで存分にご堪能ください。

ご来場の皆様へお願い

- 客席内では携帯電話の電源をお切りいただくか、マナーモードにご設定ください。
- 客席でのご飲食は固くお断り申し上げます。ロビーにてお済ませください。
- 演奏中の客席への入場および座席の移動はご遠慮ください。開演後のご入場は、曲間にスタッフがご案内致します。客席中央部への移動はご遠慮ください。
- お荷物などはお足元にお願い致します。
- 後からご入場されるお客様のために、先にご着席の方は出来るだけ通路側の座席を空けてください。
- お子さまの客席でのご鑑賞が難しい場合、暫くの間ロビーにご移動ください。
- 厚木交響楽団の主催公演では小さなお子様のご入場は制限いたしておりません。これは１人でも多くの方に生のオーケストラをお楽しみ頂くとともに、クラシックコンサートの雰囲気、マナーについても慣れていただきたいという本団の主張でもあります。共演頂く指揮者をはじめアーティストの方には、予め入場制限のない事はご承諾いただいております。

- クラシック音楽はなるべく静かな環境のもとでお楽しみ頂くものです。ご来場の皆様が静かで落ち着いたより良い環境のもとで本日の演奏会をお楽しみいただけますように、皆様おひとりおひとりのご協力をお願い申し上げます。

厚木交響楽団　団員一同

プログラム

《スメタナ》
歌劇「リブシェ」序曲　（約8分）
《Bedřich Smetana》　Libuše - Overture

《ドヴォルザーク》
チェロ協奏曲　（約40分）
《Antonín Dvořák》　Cello Concerto in B minor, Op. 104

休　憩（15分）

《ドヴォルザーク》
交響曲第7番　（約37分）
《Antonín Dvořák》　Symphony No. 7 in D minor, Op. 70

プロフィール

指揮・石﨑真弥奈 ／ Mayana ISHIZAKI, conductor

東京音楽大学指揮専攻卒業、同大学院指揮研究領域修了。指揮を広上淳一、高関健、下野竜也、汐澤安彦、時任康文、三河正典の各氏に師事。2016年PMFのコンダクティング・アカデミーに選出され、ジョン・アクセルロッド氏に師事。

2011年度、公益財団法人新日鉄住金文化財団の指揮研究員に選ばれ、紀尾井ホール室内管弦楽団などで研鑽を積む。

2017年イタリアにて、第2回「ニーノ・ロータ国際指揮者コンクール」でニーノ・ロータ賞（優勝）および聴衆賞（マテーラ、ターラントの各地にて）を受賞。2012年、第16回 東京国際音楽コンクール〈指揮〉において入選（1位～3位なし）、同時に聴衆賞を受賞。

これまでに、読売日本交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、京都市交響楽団、日本センチュリー交響楽団、大阪交響楽団、札幌交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、山形交響楽団、群馬交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、広島交響楽団、兵庫芸術文化センター管弦楽団、岡山フィルハーモニック管弦楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢、セントラル愛知交響楽団、関西二期会、東京佼成ウインドオーケストラ、広島ウインドオーケストラ、ぱんだウインドオーケストラなどと共演。

オペラにおいては、モーツァルト「魔笛」、フンパーディンク「ヘンゼルとグレーテル」、プッチーニ「修道女アンジェリカ」、「ジャンニ・スキッキ」などを指揮。また、日生劇場、日本オペラ振興会、神奈川県民ホールなどにて、音楽スタッフとしても研鑽を積んでいる。

東京音楽大学非常勤講師、ATI認定アレクサンダー・テクニーク教師

チェロ・藤原寛太 ／ Kanta FUJIWARA

2007年生まれ、神奈川県二宮町出身。4歳よりスズキメソードでチェロを始める。2017年、第17回泉の森ジュニアチェロコンクール小学生の部金賞。2022年、第22回同コンクール高校生以上の部金賞。同年、第76回全日本学生音楽コンクール全国大会チェロ部門高校の部第1位。併せてNHK会長賞、音楽奨励賞を受賞。2023年、第15回ビバホールチェロコンクール井上賞。2025年、第24回東京音楽大学コンクール弦楽器部門第1位。

これまでに、アンサンブルラディアント、藝大フィルハーモニア管弦楽団、ディ・ムジカンテン室内管弦楽団、泉管弦楽団と共演。日本チェロ協会主催「第12回チェロの日」にソロ演奏で出演。京都「カフェ・モンタージュ」、二宮「ラディアンホール」、藤沢「レスプリ・フランセ」にてソロリサイタルを行う。東京、神奈川を中心にソロ、室内楽等で幅広く活動中。二宮町教育委員会表彰、南足柄市横溝千鶴子教育表彰を受賞。

これまでに、佐藤明氏、山本裕康氏に師事。堤剛、宮田大、アラン・ムニエ、ミクローシュ・ペレーニ、ルイス・クラレット、マリオ・ブルネロ、イ・カンホら各氏をはじめとするチェリストのマスタークラスを受講。東京音楽大学付属高等学校を経て、東京音楽大学に特別特待奨学生として在学中。

プログラムノート

♪ 歌劇「リブシェ」序曲

スメタナ

Bedřich Smetana(1824-1884)は、チェコ国内において「チェコ音楽の父」として知られています。当時、ボヘミア王国(現在のチェコ共和国の前身)は、オーストリア＝ハンガリー帝国による長きに渡る支配からの独立のために、皇帝フランツ・ヨーゼフⅠ世をボヘミア国王としても戴冠させる…つまり、帝国に並び立つ存在にするという重要な戴冠式のため、1872年にスメタナが書き下ろした作品が、オペラ《リブシェ》です。ところが、残念なことに戴冠式は中止、演奏も見送られてしまいました。このめでたい曲に見合う特別な機会を待ちわびて、ついに1881年、プラハ国民劇場のこけら落とし公演という晴れの場にて、無事に初演を迎えることができました。この祝祭的な序曲は、チェコ大統領の入場曲としても使われています。

リブシェ(Libuše)とは、チェコ建国にまつわる伝説の登場人物です。父王亡き後、三姉妹の末娘ながら、美しく聡明なリブシェが女王として即位しました(別書では、父は王ではなく、リブシェは裁判官に任命される)。未来を予知する予言者でもある彼女は、二人の姉と支え合いながら、部族たちを公明正大に治めてゆきます。やがて2人の貴族を仲裁することから、舞台は始まるのです。

オペラ《リブシェ》は、この伝説に基づく作品です。とある兄弟の遺産問題を公正に仲裁する女王リブシェですが、自分の意見が通らなかった兄は「女が男を裁くとは！」と怒りを露わに侮辱します。それを受け女王は、それでは自分が結婚する相手を男の王とし、国を統治させるよう伝え、将来の夫として農夫プシェミスルを指名します。兄弟の不和を取り持つ兄の恋人、そして女王と未来の王、二組の結婚式にて、女王はチェコの未来を予言します。

のびやかにこだまするファンファーレ、合間で呼応するようにコラールが響き、次第に荘厳さを増してゆきます。主部に入り、オーボエが主要主題の「リブシェのテーマ」を奏でます。思慮深い経過部を辿り、半音階で緊張感が高まった先で華々しく登場するのが、金管楽器による勇壮な「プシェミスルのテーマ」です。ここでも木管の「リブシェ」が寄り添っているのが聞こえます。終盤になると、メインテーマの「リブシェ」が自由な和声で変幻自在に現れ、静かなファンファーレが今一度主題を呼び、未来を見せながら堂々と終曲します。

♪ チェロ協奏曲

ドヴォルザーク

Antonín Dvořák(1841-1904)は、チェコ国民楽派を代表する作曲家です。1892年に渡米し、約2年間、新大陸の音楽院にて教育と研究に勤しみました。アメリカ時代最初の作品が、彼の代表作《交響曲第9番「新世界より」》であり、滞在最後を飾るのが1895年作《チェロ協奏曲》です。

作品誕生にはふたりのキーパーソンが存在します。そのひとりが、チェロ奏者ハヌシュ・ヴィハンです。彼の演奏を受け《チェロ協奏曲》が生まれ、献呈され、帰国後もふたりで何度も試演し、助言を採用するなど、まさに欠かせない人物でした。にも拘らず、肝心の初演はレオ・スターンという別のチェリストが担当したのです。それは、終楽章にカデンツァを加えるべきだというヴィハンに、作曲者が真っ向から対立したからなのですが…その理由は、もうひとりの人物にあります。

ドヴォルザークの教え子で、初恋の女性、名をヨゼファ・チェルマーコーヴァーと言います(妻アンナの姉でもあります)。今作を創作中、彼女の重病を知り、彼女が好んだ自作の歌曲《私にかまわないで(Lass mich allein)》を引用しました。しかし祈り虚しく、1895年5月、ヨゼファは他界…哀悼の想いを託し、3楽章のコーダを大幅に加筆したのです。斯様に思い入れのある終楽章に、ヴィハンは意見したのですから、まさに逆鱗に触れたことでしょう。

◆第1楽章　Allegro

ソナタ形式。提示部では、最初にオケが、次いでソロが主題を奏します。クラリネットが低音で静かに第1主題を語り出すと、弦と木管が継ぎ、堂々たる勢奏へ。日暮れ、ホルンが第2主題で温かく迎えたら、賑やかに夜は更け…迎える朝の光が、ソロの舞台です。主題は独特な旋律により不思議な明暗を湛え、時に変奏して曲は進みます。やがて穏やかな第2主題を経て、明るく主題が響くニ長調の展開部へ。ここでは第1主題を中心に展開し、特に後半のソロ、フルート(とオーボエ)が織り成す場面は聴きどころです。再現部はロ長調で第2主題から始まり、そのままコーダでテーマが輝かしく打ち鳴らされます。

◆第2楽章　Adagio ma non troppo

ABAの三部形式。まるで目醒めのようにクラリネットが主題を奏します(A)。ソロが歌い始め、やがて対話を始め、思い巡らせるように転調し、騒めき出す…急激にト短調の中間部が始まると、間もなくソロが切なく歌うの

は、《私にかまわないで》に由来する旋律です(B)。2度目はロ短調で、木管の歌にソロが繊細に寄り添います。揺らぐ旋律が優しく降り立つと、低弦の奥底からのリズムに乗せ、ホルンが彼方から呼びます(A')。誘われたソロは、木管を伴いカデンツァの如く自由に羽ばたき、コーダでは自然と風に乗り、舞い降りてはフラジョレットの技法で透き通るように遥か遠くへ行きます。

◆第3楽章　Finale. Allegro moderato

ロンド形式。低弦のリズムに乗せ、ホルンがロンド主題を開始します(A)。木管、弦と手渡す先で、ソロが主題を受け取り、やがて穏やかで技巧的な旋律(B)は切実さを帯びます。緊迫のままAを経て、新しい落差のあるリズムが現れます(C)。ソロが次第に旋律を留め、クラリネットとの重唱へ(D)。今度は華やかなCが高揚させますが、軟化する先は流水のようなA、それもすぐに激流へ変化します。ボヘミア風の旋律が展開し(E)、ロ長調でAが燦然と響くと、弱音器つきトランペットで加筆されたコーダが始まり、《私にかまわないで》そして1楽章の主題を交えながら、祈りを込めて曲を終えます。

♪ 交響曲第7番

ドヴォルザーク

チェコ国内ではスメタナが特に「父」として慕われていますが、ドヴォルザークの作品は国際的に知られています。とはいえ、もちろん“純スラヴ的”作品も数多く、特にチェコ語で書かれたオペラは国内で好評を博すも、国際的な評価には至りませんでした。一方交響曲は、チェコの要素を含ませつつ、古典的様式を守り通した点が、国境を越えた評価を得た一因と言えるでしょう。交響曲の凄まじい迫力や表現の多彩さに、民族調の懐かしさや親しみやすさが加わり、遠い私たちにも今なお響く音楽、と実感できるかと思います。

国外での名声の高まりで実現した、1884年3月のイギリス演奏旅行は大成功を収めます。6月にロンドン・フィルハーモニー協会から新しい交響曲の委嘱を受け、これが《交響曲第7番》誕生のきっかけとなりました。翌年3月17日に完成に至り、初演はロンドンにて作曲者自身の指揮により成功裏に終わり、更に他の指揮者たちの手で、ドイツ、アメリカへと伝播してゆきました。

◆第1楽章　Allegro maestoso

ソナタ形式。弦が踊り出す第1主題は、最後に跳ねる音型を繰り返します。この音型は楽章中、念を押すように形を変えて何度も登場する動機です。次いで強く3回鳴らす音型から落ちる旋律は、過去作《フス教徒》序曲に由来します。攻勢が軟化し、木管が軽やかに歌う第2主題も、伝統歌《聖ヴァーツラフ》(原曲は短調。先の《フス教徒》にも登場)の引用です。展開部は、ふたつの主題や《フス教徒》が幾重にも転調し、華やかに繰り広げられます。再現部は短く、勇ましく轟く主題と、優しい第2主題のシンプルな再現です。コーダは静かな主題が騒めき、モチーフが次々に押し寄せますが、最後は再び主題の独白で収束します。

◆第2楽章　Poco adagio

序奏付き三部形式。クラリネットが奏する序奏は郷愁的な音階で印象に残ります。木管が主題(A)で空間を温めると、弦が不安定な音程関係の旋律(B)で孤独を思い出させます。ホルンのソロが牧歌的旋律(C)で呼び掛けるのは、切実な響きの中間部です。じきに光差し込む中間部主題(D)がクラリネットを起点に転調しながら手渡され、展開して再度主題Aに戻ります。B、Cの変奏と進行し、オーボエが序奏を歌い、最後にDの下降音型がフルートからヴァイオリンへと沈み、日没です。

◆第3楽章　Vivace

スケルツォ。主題は6/4拍子ですが、高弦の3拍子(主題)＋低音の2拍子(対旋律)が重なるヘミオラ(ポリリズムの一種)で、チェコの民族舞踊「フリアント」の特徴です。今度は木管のリズムにヴァイオリンが対旋律を担い、踊りは広がります。2回目は一層ひそやかに、そしてより迫力を増して勢奏され、そのまま一区切りへ。トリオではオーボエが提示するトリオ主題が、ソナタ形式のように展開します。フリアントのリズムが戻ってきたらスケルツォに戻り、より拡大して勇壮に楽章を閉じます。

◆第4楽章　Allegro

フィナーレ、ソナタ形式。唐突に始まるオクターヴの第1主題は、1楽章の《フス教徒》の旋律に由来し、その後に弦楽と木管が続ける重厚な旋律も、《聖ヴァーツラフ》(に基づく《フス教徒》内の旋律)に共通するという指摘があります。オクターヴが駆け上がるように変化し、更に木管から打つ動機(e)、そしてヴァイオリンから半音階で始まる動機(f)が浮上します。イ長調でチェロが第2主題を奏で、やがて弾むような動機(g)が発展し最高潮へ。展開部では主題が変奏され、点描やカノン、果ては副次動機で築き上げます。2回、主題を予感した後、主調で登場したら再現部へ。第2主題、gの祝祭を経て、そのままコーダへ進み、最後に主題の変奏を以って終曲とします。

(大塩聡子)

出演者

第１ヴァイオリン
荒井あゆみ(賛)　荒井　隆(賛)　池田　響★　池田麻里子　石川　朋子　遠藤裕歌吏
栗原　まな(休)　齋藤　千絵★　柴田　悦子　関山　真希(休)　田畑　史菜　田淵　紀子
富永　和雄　宮入　正幸○　吉岡　章城　吉野　千里

第２ヴァイオリン
鰺坂　栄子　天野　克子☆　池間　瑞姫(賛)　井上　才織　今村　悦子　神崎　秀子
左納　里美(賛)　鈴木　明美　鈴木　美香　髙橋　たき(休)　長尾　公俊　馬場　亜美
古田　奈央　山崎　達也

ヴィオラ
新井　史子(賛)　牛久　浩子　大山　浩吉　岡田　史子　佐藤　光則　佐藤由香利▲
島　悦子　清水　進吾　西村　恵美(賛)　柳澤永遠子

チェロ
赤間　崇(賛)　井上　左穂　大山　剛史　小原　康幸　笠井　嘉人○　工藤　敏朗
谷川　昭▲　堀端みづき　矢部　荘夫(賛)　山口佐知子(賛)

コントラバス
大毛　肇　小形　卓嗣(賛)　奥田　真▲　小泉聡一朗(賛)　新里奈美子(賛)　早坂　絢子(休)
松原　美幸(賛)

フルート
井原明喜子▲○△　島　達朗◎　鈴木　美紀　曽根　美樹

オーボエ
大滝　篤史▲　鈴木　圭介　村上　舞子

クラリネット
安藤　孝子　芹澤　裕一　田﨑　良美　西尾ゆかり▲

ファゴット
佐藤　絢子▲　鈴木　海音

ホルン
井原　宣孝▲　長南　花(賛)　樋口　優子　村尾真由子　山崎　雅彦

トランペット
大鷲　優斗　後藤　律子●　友田　和男▲　中山　明子

トロンボーン
佐藤　秀義▲○　樋口　佳奈(休)　福井　雅洋(賛)

バストロンボーン
原田　博之

チューバ
樋口　学(賛)

打楽器
工藤　英希(賛)　小島　柊香▲　鶴牧淳一郎　西尾　宙

トレーナー
山上　孝秋　山本　亮

指揮者
石﨑真弥奈(客演)

ソリスト
藤原　寛太(客演)

ステージマネージャー
田代　邦幸

◎ 団長
● 副団長
☆ 名誉コンサートマスター
★ コンサートマスター
△ インスペクター
▲ パートリーダー
○ セクションリーダー
(賛) 賛助出演
(休) 休団中もしくは本日休演

厚木交響楽団友の会

友の会会員一覧（敬称略）

2026年３月現在

Concerto　飯塚　正道　片山　文彦　小林　克則　下田　恵子

Duet　新井　敏郎　石射　正英　三瓶ハル子　長野　聖子　花上　裕子　村上　治
渡辺　仁志・幸子

Solo　関　悦子　中村　泰昌　楢原　章江　長谷川真由美　原田　直樹　宮崎美知子
渡辺孝太郎　三代　道義

お名前の掲載を希望されない方が15名いらっしゃいます

友の会詳細はWebで！ ▶ https://www.atsukyo.com

厚木交響楽団今後の演奏会予定

◆第95回定期演奏会

2026年10月11日（日）
厚木市文化会館大ホール　13：00開場／13：30開演
指揮：松村優吾

- ブラームス　悲劇的序曲
- ヒンデミット　ウェーバーの主題による交響的変容
- ベートーヴェン　交響曲第7番

厚木交響楽団 定期演奏会チケット完全電子化のお知らせ

厚木交響楽団では、数年前より電子チケットを導入し、紙チケットと併用してまいりました。
このたび、昨今の社会情勢を鑑み、次回の第95回定期演奏会より、全てのチケットを電子チケットへ完全移行させていただくこととなりました。
移行当初はご不便をおかけすることもあるかと存じますが、何卒ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

厚木交響楽団団員募集

厚木交響楽団では、現在下記のパートを募集しています。
ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、ファゴット、打楽器

まずは楽器を持って練習に体験参加してみませんか？
経験者の方、ご連絡をお待ちしております。

◆お問い合わせ先：Tel & Fax 046-247-6751（神崎）

合奏の練習は原則毎週日曜日の17時から21時、小田急線・本厚木駅周辺の施設で行っています。
詳しくは、厚木交響楽団のホームページ（https://www.atsukyo.com）をご覧下さい。

本日の演奏会のご感想をぜひお聞かせください

スマートフォンでQRコードを読み取り、簡単にご回答いただけます。

ATSUGI SYMPHONY
ORCHESTRA
Since 1977